



建学の精神

「神を畏れることは知識のはじめである」

(箴言 1章 7節)

岐阜済美学院の基礎は、1918年(大正7)片桐龍子により、女性の自立のための教育を目的として置られました。片桐龍子の後継者であり、キリスト者であった片桐孝の志により、第二次世界大戦直後、キリスト教主義の学校となりました。この建学の精神は片桐孝により、旧約聖書の箴言 1章 7節に基づいて定められたものです。「神を畏れる」とは愛と義と公平を求める神の意志を尊重することであり、そこよりはじまる「知識」は、技術的知性だけでなく、それを真に生かす叡知的理性を指します。またそれは、隣人愛に生きることを促し、正義、自由、平和を祈り求める「知識」のことです。



岐阜済美学院 校章・マーク
創立 80 周年と中部学院大学の開学を記念して、公募されたシンボルマークです。学院の未来や社会への貢献を目指し、生き生きと躍動する人物の姿を表現しています。

学校法人 岐阜済美学院

〒501-3993 岐阜県関市桐ヶ丘2-1

TEL : 0575-24-1511 FAX : 0575-24-1515



創立

岐阜済美学院は、1918年(大正7)片桐龍子によって、岐阜の溝旗神社の一隅に始められた裁縫塾を端緒とします。翌年(岐阜裁縫女学校)となり、龍子が校長に就任。東京裁縫女学校(現・東京家政大学)に学び、良家で行儀見習いを修めた龍子は、国家神道の信心も深く、技術だけでなく良妻賢母教育にも長けていたから、学校はたちまち評判となり多くの生徒が集まるところとなりました。

2年後には岐阜市田生越町に新校舎を落成。高等女学校令に呼応して、より教養的な一般教育を目指し、1925年(大正14)〈岐阜実科高等女学校〉を開学、夫の龍三郎が校長に就任しました。1928年(昭和3)岐阜裁縫女学校は、〈岐阜女子高等芸芸学校〉に。1940年(昭和15)龍子が校長に就任しています。龍子は外部からも講演の依頼を受けたり、著作を出し、女性教育者として、その名を知られる存在になっていきました。

岐阜実科高等女学校は、1940年(昭和15)〈片桐高等女学校〉と改称しますが、わずか2カ月後に龍三郎が逝去。龍子は二校の校長を兼務するという激務をこなしました。一人息子の登喜夫のもとに、クリスチャンで、奈良女子高等師範学校出身の山本孝が嫁いできたのも、同じ年です。

片桐高等女学校は、1942年(昭17)教育勅語にある〈済美〉にちなみ、〈岐阜済美高等女学校〉と改称。同年、龍子が校長を退任します。時節柄、平和主義を貫く龍子の発言が、特別高等警察(社会運動対象の政治警察)にマークされることになったことへの配慮でした。

1944年(昭19)財団法人岐阜済美学園の設置が認可され、登喜夫が理事長に就任。同年、〈岐阜済美女子商業学校〉が開校しました。ところが1945年(昭和20)5月10日登喜夫が逝去したため、孝が夫の後を継いで理事長に就任することになります。続く敗戦で、GHQの「日本教育制度に対する管理政策」に伴ない国家神道、神社神道も否定されることになりました。これまで龍子の国家神道に対する強い信仰で牽引されてきた岐阜済美学園も、方向転換を余儀なくされたのです。理事会で協議の結果、孝にすべてが委ねられ、龍子の承認も得て、岐阜済美学園はキリスト教主義の学校として再出発することになりました。



左から、創立者 片桐龍子(1890~1963年)
継承者 片桐孝(1914~2001年)
龍子が種を蒔き、育て、孝が新たな生命を吹き込みました。

創立の背景と歴史

片桐龍子は、1890年(明治23)愛知県の山村(現・北設楽郡東栄町)の原田家に生まれ、18歳で上京し東京裁縫女学校で学びました。「卒業後は海外に出て、世界の実状を学びたい」と望む、当時としては先進的な考えを持った女性でした。両親の反対で、海外渡航は実現せず、卒業後まもなく、岐阜の片桐龍三郎と結婚。しかし、家庭の主婦では収まらず、女子教育という社会貢献を志して裁縫塾を始めます。

厚見村(現・岐阜市正法寺町)の1万200㎡を、1941年(昭和16)校地として購入したものの、土地代金の返済に追われて、まだ校舎は建てられていませんでした。その大切な校地が、戦後の農地改革のために不在地主と見なされ没収される恐れが生じます。敗戦当時、学監の地位にいた龍子は、教員不適格の通知を得て追放の身になっていましたが、学院の役に立とうと緻を持ち、空き地となっていた校地の耕作を始めました。収穫された作物はバザーなどにも用いられ、慣れない作業に苦勞しながら、結果として没収を免れたという逸話があります。

岐阜済美学院は、そんな龍子が種を蒔き、育て、孝によって新たな生命を吹き込まれたといえるでしょう。

戦後、キリスト教主義学校として再出発を決めた孝は、早速、地域担当の軍政官であるW・A・ガスタフソンを訪ねました。ガスタフソンは開口一番「岐阜は有名な仏教県です。そこでキリスト教を標榜すると、学校が潰れるかもしれませんよ。それでもいいのですか」と聞きました。

教職員の中には、この180度の転換に「協力できない」として去っていった人もありました。不安を抱く父兄、「母校を失ってしまったようだ」と悲しむ同窓生の声も耳に入りました。しかし、後には引けません。孝は、地域のキリスト教会の牧師に参集を願い、協力を依頼しました。大阪から岐阜に移って5年、孝にはまだ地元頼るキリスト者の知人がおらず、超教派で呼びかけました。そこで教えられたのがJ・A・マカルピン宣教師でした。

マカルピンは祖父、父と三代にわたって日本での伝道続けてきた改革派の宣教師で、1905年(明治38)名古屋で生まれた人でした。1935年(昭和10)アメリカ・リフォームドの宣教師として岐阜市に赴任しましたが、戦争のために帰国し、戦後はいち早く来日、神戸に仮住まいしていたのです。マカルピンは教派を問うこともなく、孝の申し出を快諾し、金城学院院長の市村與市を紹介してくれました。市村は人事の面で絶大な協力を果たし、以来両校の間では、親密な交流が続いています。マカルピンも1949年(昭和24)から1975年(昭和50)の期間、理事長に就任しています。

岐阜済美学院の方針転換に対し、「時流にあやかろうとしたものだ」という陰口を言う者もありました。しかし、孝の実家は祖母、両親、二人の兄もクリスチャンというクリスチャンホームで、孝を登喜夫に紹介した奈良女子高等師範学校教授の越智キヨも、同じクリスチャンとして師弟の絆を深めた間柄でした。国家神道を熱心に信奉する龍子は、「私の神さまは日本の神さまで、あなたの神さまは世界の神さまです。私は聖書もよく読んでいますが、キリスト教は立派な宗教です」と言っ、これを受け入れ、のちに受洗するに至りました。